

広場空間の質の向上に向けた取り組みについて



都市研究部 都市施設研究室 室長 新階 寛恭 主任研究官 吉田 純土

(キーワード) 中心市街地、歩行者、賑わい、広場、実験

1. はじめに

国総研では、中心市街地等における広場が多くの人に憩いの場や交流の場として活用されるよう、広場の質の向上を図るための研究を行っている。その一環として、都市内広場の大きな樹木やベンチ等の配置が歩行者の行動に与える影響を把握するための実験を行った。本稿ではその実験の内容について紹介する。

2. 実験の概要

実験は、富山グランドプラザ(屋内空間)において平日の5日間(各6時間)にわたり行った。各日ともに樹木、椅子、テーブル、ベンチ等の配置変更を行い、歩行者の行動を記録した。記録方法としては、

- (1) トレース(調査員の追跡による歩行軌跡の把握調査)、
- (2) スタティック・ログ(滞留行動の観測)、
- (3) ゲートカウント(出入口の歩行者交通量のサンプル調査)を用いた。得られたデータに関しては、図のように歩行者動線や滞留行動が視覚的に分かるように表現した。



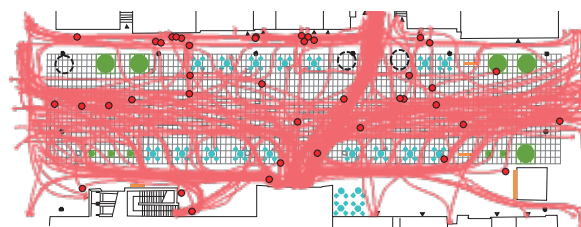
写真 実験の様子

3. 実験結果

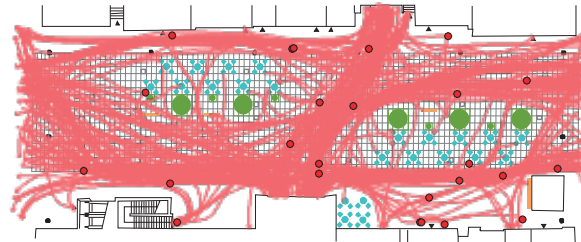
実験の結果、(1) 植栽や飲食店などによって、滞留を期待する箇所に囲われ感を形成することにより、多くの歩行者滞留が発生すること、(2) 座席や植栽の配置を変更することにより、滞留空間にお

ける通り抜けが減少する等の移動軌跡の分布が想定以上に变化した等、空間構成要素の配置パターンが空間の使われ方に大きく影響を及ぼすことが明らかになった。

パターン1



パターン2



✦ 椅子・テーブル ● 植栽 ● 立ち止まり箇所 → 移動軌跡

図 配置パターンと歩行動態の例

4. 今後の研究について

今回得られたデータをもとに、今後は滞留時の詳細な行動内容(会話、食事等)を把握することにより、広場のレイアウトが広場空間の質へ及ぼす影響(賑わいの創出、コミュニティの形成等)を分析したい。さらに周辺施設との接続状況や広場利用者の属性を把握することで広場の分類を行い、立地に適した広場のアクティビティ促進方策や周辺環境等に合わせた広場づくりを行うためのマニュアルを発出する予定である。

【関連資料】賑わいづくり施策「発見」マニュアル
<http://www.nilim.go.jp/lab/jcg/index.files/nigiwai.pdf>